

重み関数の改善による FPM の多次元問題解析精度の向上

Improvement in Accuracy of FPM for 2-D and 3-D Analyses with a New Weighting Function

北海道大学大学院工学研究科 学生員 京田康宏(Yasuhiro Kyoda)
 北海道大学大学院工学研究科 正員 蟹江俊仁(Shunji Kanie)
 北海道大学大学院工学研究科 フェロー 三上 隆 (Takashi Mikami)

1. 序論

近年、数多くのメッシュフリー法が提案されてきた。これらの手法は、一般的に形状関数の作成法と、支配方程式の離散化の組み合わせによって分類される。それらの組み合わせの中でも、weighted least squares approximations(以下 WLSA)と point collocation を用いた Finite Point Method(以下 FPM)は、要素も積分格子も必要としないことから、完全なメッシュフリー法であると言える。FPM は定式化が容易であり、節点の配置が自由であるといった利点を有している。京田([3],[4],[5])らは Timoshenko beam の曲げや固有値問題への適用を試みている。本論文では、2次元、3次元 Poisson 方程式に新しく提案した重み関数を適用し、その妥当性を検討していく。

2. WLSA による近似関数の設定

領域 $x, y \in \Omega$ で定義される関数 $u = f(x, y)$ に対して、領域内の任意の評価点 (x, y) における関数 u は次式を用いて近似的に表されるものとする。

$$u(x, y) \cong \hat{u}(x, y) = \sum_{i=1}^m p_i(x, y) \alpha_i = \mathbf{p}(x, y)^T \boldsymbol{\alpha} \quad (1)$$

ここに、 \hat{u} は近似解、 \mathbf{p} は基底関数ベクトル、 $\boldsymbol{\alpha}$ は未定係数ベクトルである。ちなみに 2次元で $m=6$ の場合には、 $\mathbf{p}(x, y) = [1, x, y, x^2, xy, y^2]^T$ となる。

WLSA では、次式で定義される評価関数 Π を最小にするように未定係数 α_i を決定する。

$$\Pi = \sum_{j=1}^{NP} w_j (\mathbf{x}_j - \mathbf{x}_i) (u(\mathbf{x}_j) - \mathbf{p}^T \boldsymbol{\alpha})^2 \quad (2)$$

ここに、 $\mathbf{x} = (x, y)^T$ であり、 NP は節点数、 \mathbf{x}_i 、 w_i はそれぞれ評価点の節点座標とその重み関数である。ここで、

$$\mathbf{P} = [\mathbf{p}(x_1, y_1), \mathbf{p}(x_2, y_2), \dots, \mathbf{p}(x_{NP}, y_{NP})]^T \quad (3)$$

$$\mathbf{W} = \text{diag}(w_1, w_2, \dots, w_{NP}) \quad (4)$$

$$\mathbf{u} = [u(x_1), u(x_2), \dots, u(x_{NP})]^T \quad (5)$$

と表し最小化の条件を付与すると、

$$\boldsymbol{\alpha} = \mathbf{M}^{-1} \mathbf{B} \mathbf{u} \quad (6)$$

ここに、

$$\mathbf{M} = \mathbf{P} \mathbf{W} \mathbf{P}^T \quad (7)$$

$$\mathbf{B} = \mathbf{P} \mathbf{W} \quad (8)$$

とおいた。式(1)と式(6)から未定係数 $\boldsymbol{\alpha}$ を消去して、

$$\hat{u}(x, y) = \mathbf{p} \mathbf{M}^{-1} \mathbf{B} \mathbf{u} = \sum_j^{NP} N_j u_j \quad (9)$$

が得られる。ここで N は形状関数である。

既往の研究では重み関数として、4次スプライン関数や指数関数が使用されているが、本研究では、新しく以下の関数を提案する(式(10))。

$$\varphi = \frac{2}{\lambda} \left[\exp\left(\frac{rx}{\lambda}\right) + \exp\left(-\frac{rx}{\lambda}\right) \right]^{-2} \quad \left(\lambda > 0, rx = \frac{x-x_i}{\rho_i} \right) \quad (10)$$

全体の重み関数は

$$w = \varphi(x) \cdot \varphi(y) \quad (11)$$

となる。ここで、 ρ_i (サポート半径)は重み関数の大きさを示している。式(10)は評価点周辺の幅 λ 程度の小区間で $1/\lambda$ 程度の値をもち、その外で急速にゼロに近づく関数である。従来の重み関数は、重み関数の範囲内に含まれる点数 n が大きくなると、評価点とその近傍の点の重さを同等に評価してしまう(Fig. 1(b))。しかし、式(10)では評価点の重みが十分に大きいので、より正確に評価点での計算が行えるのである(Fig. 1(a))。

また、本解析では、節点配置の疎密に関らずが一定に保たれるように ρ_i を変化させている。さらに、基底関数 \mathbf{p} 中の変数 x, y を ρ_i で正規化する(式(12))。

$$\xi = (x - x_i) / \rho_i, \quad \eta = (y - y_i) / \rho_i \quad (12)$$

式(7)は大きさの異なる成分が存在する性質の悪いマトリクスであるが、正規化を行うことでその性質は改善される。

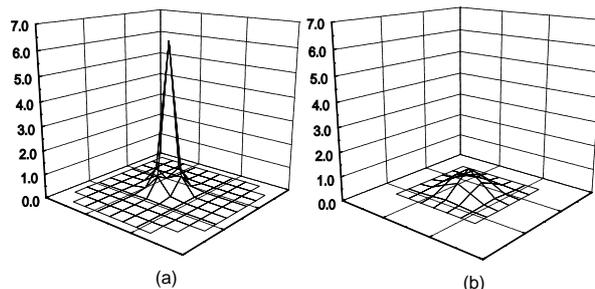


Fig. 1. Comparison of the weighting function ($m=6, n=25, \lambda=0.2$): (a) new weighting function (eq.(10)), (b) quartic spline function.

3. 選点法による支配方程式の定式化

2次元問題で微分方程式を以下のように定義する。

$$L(u) = f \text{ in } \Omega, \quad u = g \text{ on } \Gamma_g, \quad \frac{\partial u}{\partial n} = h \text{ on } \Gamma_h \quad (13)$$

ここに、 L は微分演算子である。式(13)はそれぞれ支配方程式、ディリクレ境界条件、ノイマン境界条件である。近似解 $\hat{u}(x)$ によって近似される未知関数 $u(x)$ に重み付き残差法を用いると、次式が得られる。

$$\int_{\Omega} (L(\hat{u}) - f) w d\Omega + \int_{\Gamma_g} (\hat{u} - g) \bar{w} d\Gamma_g + \int_{\Gamma_h} \left(\frac{\partial \hat{u}}{\partial n} - h \right) \bar{\bar{w}} d\Gamma_h = 0 \quad (14)$$

ここで、重み関数を $w = \bar{w} = \bar{\bar{w}} = \delta$ とする。 δ は Dirac delta である。式(14)は

$$\mathbf{K} \mathbf{u} = \mathbf{F} \quad (15)$$

と表すことができる。 \mathbf{K} は剛性マトリクスであり、 $\mathbf{K} \in \mathbb{R}^{NP \times NP}$ 、 $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^{NP \times 1}$ 、 $\mathbf{F} \in \mathbb{R}^{NP \times 1}$ となる。一般に剛性マトリクスの対称性は得られない。領域内の点を I 、ディリクレ境界上の点を M 、ノイマン境界上の点を N とすると、剛性マトリクスは次のようになる。

$$\mathbf{K}_{Ij} = L(N_j(x_I, y_I)), \mathbf{K}_{Mj} = N_j(x_M, y_M), \mathbf{K}_{Nj} = \frac{\partial N_j(x_N, y_N)}{\partial n}, \quad j=1, 2, \dots, NP \quad (16)$$

4. 2次元 Poisson 方程式への適用

2次元 Poisson 方程式に本手法を適用する . 支配方程式と境界条件は以下のように与えられる .

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} = -6x - 6y - \left[\frac{4}{\alpha^2} - 4\left(\frac{x-\beta}{\alpha^2}\right)^2 - 4\left(\frac{y-\beta}{\alpha^2}\right)^2 \right] \times \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad 0 \leq x \leq 1 \quad 0 \leq y \leq 1 \quad (17)$$

$$u(x=0) = -y^3 + \exp\left[-\left(\frac{\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (18)$$

$$u(x=1) = -x^3 + \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (19)$$

$$\frac{\partial u}{\partial x}(x=1) = -3 - 2\left(\frac{1-\beta}{\alpha^2}\right) \exp\left[-\left(\frac{1-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (20)$$

$$\frac{\partial u}{\partial y}(y=1) = -3 - 2\left(\frac{1-\beta}{\alpha^2}\right) \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{1-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (21)$$

ここに , $\alpha = 0.2, \beta = 0.5$ である . 厳密解は式(22)である .

$$u = -x^3 - y^3 + \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (22)$$

数値計算における誤差の評価には式(23)を用いる .

$$\varepsilon = \frac{1}{|u|_{\max}} \sqrt{\frac{1}{NP} \sum_{i=1}^{NP} [u(x_i) - \hat{u}(x_i)]^2} \quad (23)$$

ここで , ε は誤差 , u と \hat{u} はそれぞれ厳密解と解析解を表している . ここでは $\lambda = 0.2, m = 6$ として解析を行う . 異なる重み関数を適用した場合の解の収束性を示すために , 点数が 121, 289, 1089 のランダム配置で解析を行っている . Fig. 2 から $n = 25$ の時 , 4 次スプラインが $n = 16$ と比べて全体に精度が悪化しているのに対して , 式(10)は $n = 16$ と比較しても同程度の収束性が得られていることがわかる .

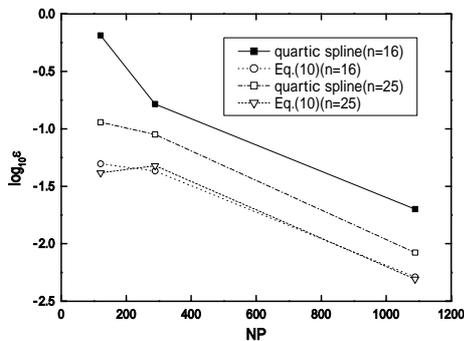


Fig. 2. Convergence plot when the cloud size is 16 and 25.

5. 3次元 Poisson 方程式への適用

次に , 3次元 Poisson 方程式に適用する . 支配方程式と境界条件は以下のように与えられる .

$$\frac{\partial^2 u}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 u}{\partial z^2} = -6x - 6y - 6z - \left[\frac{6}{\alpha^2} - 4\left(\frac{x-\beta}{\alpha^2}\right)^2 - 4\left(\frac{y-\beta}{\alpha^2}\right)^2 - 4\left(\frac{z-\beta}{\alpha^2}\right)^2 \right] \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{z-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad 0 \leq x \leq 1 \quad 0 \leq y \leq 1 \quad 0 \leq z \leq 1 \quad (24)$$

$$u(x=0) = -y^3 - z^3 + \exp\left[-\left(\frac{\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{z-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (25)$$

$$u(y=0) = -x^3 - z^3 + \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{z-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (26)$$

$$u(z=0) = -x^3 - y^3 + \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (27)$$

$$u_x(x=1) = -3 - 2\left(\frac{1-\beta}{\alpha^2}\right) \exp\left[-\left(\frac{1-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{z-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (28)$$

$$u_y(y=1) = -3 - 2\left(\frac{1-\beta}{\alpha^2}\right) \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{1-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{z-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (29)$$

$$u_z(z=1) = -3 - 2\left(\frac{1-\beta}{\alpha^2}\right) \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{1-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (30)$$

ここに , $\alpha = 0.2, \beta = 0.5$ である . 厳密解は式(31)である .

$$u = -x^3 - y^3 - z^3 + \exp\left[-\left(\frac{x-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{y-\beta}{\alpha}\right)^2 - \left(\frac{z-\beta}{\alpha}\right)^2\right] \quad (31)$$

誤差の評価には式(23)を用いる .

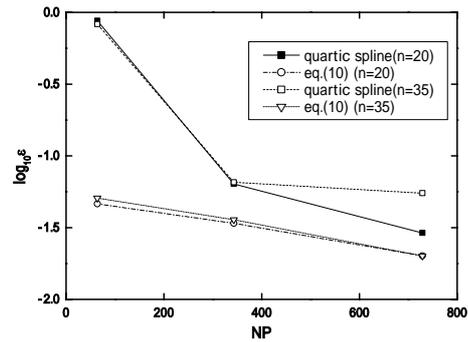


Fig. 3. Convergence plot with different polynomial basis.

ここでは , $\lambda = 0.2, m = 10$ とする . 異なる重み関数を適用した場合の 3次元における解の収束性を示すために , 点数が 64, 343, 729 のランダム配置で解析を行っている . Fig. 3 から 2次元の場合と同様に , 式(10)の重み関数の安定性が優れていることがわかる .

6. まとめ

FPM は任意の節点配置に適用可能であることが特徴であるが , 従来の重み関数では点の配置が不均一である時 , 精度の低下が見られた . しかし , 式(10)の重み関数を用いることにより , 計算点での値を十分に評価することが可能になり , ランダムな点配置であっても解析精度が維持される . これにより , 2次元 , 3次元問題のように一定の点数を選択しにくい問題に対して , より一層適用性が向上したと言える . 今後は , 2次元 , 3次元弾性問題への適用性を確認していく予定である .

参考文献

- 1) Xiaozhong Jin, Gang Li, N.R. Aluru, "Positivity condition in meshless collocation method", Comp. Meth. Appl. Mech. Engng., 193 pp1171-1202, 2004
- 2) E. Onate, F. Perazzo, J. Miquel, "A finite point method for elasticity problems", Computers & Structures, 79 : pp2151-2163, 2001
- 3) 京田康宏, 蟹江俊仁, 寺田学: 重み付き最小自乗法によるメッシュフリーFEMの一次元問題への適用 土木学会北海道支部論文報告集, Vol 59, pp.128-131, 2003
- 4) 京田康宏, 蟹江俊仁, 寺田学: Finite Point Methodの一次元問題適用について, 土木学会第58回年次学術講演会, p445-446, 2003
- 5) 京田康宏, 蟹江俊仁, 三上隆: Timoshenko beam 座屈問題への Finite Point Method 適用について 土木学会北海道支部論文報告集, Vol 60, pp.64-65, 2004